

魔法の錬金術

*"Watch your back.
Shoot, straight.
Conserve Spell Card.
And never, ever,
cut a deal with a DRAGON,
Never trust an Elf."
-Xanadu proverb.*



3人の魔法使いと
1人の魔法少女と
1人の大魔法使いがいます。

さて、この中で仲間外れは誰でしょう？

▼博麗神社、縁側における巫女との日常

雁来たる高い秋晴れの空の下、人里には実る稲穂が金色に照り映え、木々は風と共に赤橙黄の落葉を散らす。訪れた静寂と収穫の季節に、今年も秋の神様は揃って精を出しているらしい。

「お茶にしようかな」

境内に散り敷かれる紅葉を見渡して溜息一つ。霊夢は石畳を掃く手を止めてつぶやく。

日が傾き始めればそろそろ肌寒い秋風の中、掃除用具を片付け、袖を重ねて少女が裏庭に回れば、

「よー、霊夢、邪魔してるぜー」

縁側には既に大の字に横たわる白黒魔法使いの姿があった。

季節に先駆けて早々と衣代えを済ませた厚袖ブラウスの端をわずかに煤けさせているところを見るに、どこかで一戦やらかした後らしい。足元には本日の収穫と思しき本が教冊、革ベルトのブックホルダーに納まっていた。

「疲れたから茶でもくれー」

「……自分で淹れなさい」

呆れた表情を隠すこともせず、霊夢は居間に上がつてちやぶちやぶに腰を下ろす。魔理沙はやれやれ面倒だぜとぼやきながらも、

勝手に戸棚を漁って手際よく煎餅とお茶を用意して戻ってきた。やや湿気気味の煎餅をぱきりとかじり、霊夢は頬杖をついて魔理沙を見る。

「毎度良くやるわね」

「元はと言えばお前の尻拭いしてやってるんだぞ？」

わかってんのか、と魔理沙は視線の温度を下げる。

紅霧異変の折に悪魔の妹を館の外に出すきっかけを作ったのは博麗の巫女のはずなのだが、今では大図書館に通い詰めるのはすっかり魔理沙の役割だ。

「こっちはこっちで姉につきまとわれて面倒なのよ」

「会うたび命懸けの弾幕ごっこよりはなんぼかマシだと思っただよ」

「……最近、スキがあれば咬んで来ようとするのよね、あいつ」

「蚊取り線香でも焚いとけ」

レミア本人はスキシツプと言い張っているが、咬まれる側の食料としてはいろいろと切実な問題である。

とは言え、魔理沙もフランドールの遊び相手を務めることで、紅魔館への出入りを黙認されている節もあるため、一概に霊夢が非難されるいわれはないのだった。

それでもわざわざ、魔理沙は正規の貸し出し手続きを取らずに本を持ち出しているという。いつだったか新聞屋があれこれと喋っていたことを、霊夢が思い出すともなしに思い返してい

ると、魔理沙は空の湯呑みを隣にこもりと仰向けになる。

「で、今日の夕飯はなんだ？」

「ごく潰しに食べさせるつもりはないわよ。それでなくても今月厳しいんだから」

「厳しいのはいつもだろ——おうっ」

余計なひと言に、ほぼ無動作で霊夢の符が飛ぶ。すばあんと景気の良い音を響かせて額に一撃食らった魔理沙は、衝撃に仰け反って、どしんと縁側から庭へ転げ落ちる。

いてて、と呻きながら、ペリペリと額に張り付いた符を剥がして庭に身を起こし、魔理沙は口を尖らせた。

「……うー、不意打ちは卑怯だぜ」

「避けられないのが悪いんでしょ」

「最近、お前の符がハリセンと大差なくなってきたる気がするんだが」

妖怪じゃないんだから対処を変えろよなとぼやき、魔理沙は大きく伸びをして肩を鳴らす。

いつもならばじやあひと勝負だぜ、と続く言葉が無いことに、霊夢は少々拍子抜けした。

良く見れば、魔理沙の表情には色濃い疲れが滲んでいた。

またぞろ新スペルの開発にでも夢中になって夜更かしでもしていたのだろう。珍しく素直なもの、神社に寄ったのが本当にただの休憩なのだったとしたら領けるところだった。

「……なんだか今日は気分が乗らないし、帰るかね」

「賢明ね。そもそもさっきのであんたの残機1でしょ」

「あー、もうそれでいいぜ。んじやな」

ややくたびれた声でひらひらと手を振り、魔理沙は脇に放っていた帽子を掴み、箒を手立ちあがった。手際よく爪先だけでブーツを探り当て、庭に降りて地面を蹴る。スカートのフリルを揺らしひらりと箒の上に飛び乗って——

「うげっ!？」

そのまま思い切り、鼻から地面に突っ伏した。

飛び上った反動で思い切り顔から庭の植木に突っ込み、少女は涙目で赤くなった鼻をさする。

「痛てて……」

「……何やってるの？」

「ああ、いや……おかしいな……?」

呆れる霊夢に、魔理沙は髪に絡んだ落ち葉を払い、箒を手首を捻る。矯めつ眇めつ柄の具合を確かめ、穂を調べ、重心を取るように握り、今度は慎重に座る位置を調整して箒を跨ぐ。

「……………」

じっと目を閉じ、何事か呟いてしばし集中を凝らすことしばし。しかし、いつもならわずかの間も挟まずふわりと空へ舞い上がるはずの魔法使いの足は、いつまで経っても地面を離れない。

「よ……このつ、くぬつ、ていつ」

箒に跨ったまま、びよんぴよんと地面を跳ね——庭を駆けまわってひとしきり。

魔理沙は軽く息を荒げて、霊夢の方を振り向いて。

「なあ、なんか飛べなくなったみたいだぜ？」

そう呟いた。

▼魔法の森、工房における魔法使いの独白

結局。

霊夢のところで夕飯をたかり、魔法の森まで戻ったところにはすっかり夜も更けていた。じじ、と燃えるランプの灯りの下でランタン^{ランタン}の火を消し、魔理沙は汗で汚れた額をぬぐう。普段なら味噌汁が冷めない神社までの距離は、歩けば二刻もかかる道のりだった。

灯りにと借りた提灯をたたみ、魔理沙は工房^{アトリエ}として使っている奥の部屋へと向かう。

「うーむ……」

森の奥で茸の探索を終えてから、紅魔館まで往復しての弾幕

ごつこの連載。充実した一日には違いなかったが、それらの影響か、流石に全身はかなりの疲労を訴えている。手足は重く、できればこのままベッドに倒れ込みたい気分だった。

だが今はそれよりも先に確認すべき事がある。収穫物をベッドの上に放り投げて、汗に濡れた服を脱ぎ散らかし、シャワーを浴びて身体を丹念に清める。濡れた髪を拭くのもそこそこに、魔理沙は下着のまま工房の机に向かった。

山と積まれた本や実験器具を脇に押しつけ、引き出しから取り出したのは数枚の紙片。

魔法の森の茸から抽出した成分を染み込ませた試験紙に、ナイフで指先を突いて渗んだ血と唾液を垂らす。

乙女の血を吸った試験紙は、数秒ほどをかけて緑から青へと鮮やかに色を変えた。

「……ふむ」

魔法使いの力というものは、単純な技量以外に多くの外的要因の影響を受ける。健康状態、精神状態、月齢に星辰、季節、信仰、地脈気脈、人間関係。千差万別の条件の中で定まらない魔力を保ち、いかに普段と同じ力を行使するか。魔法使いの命題の一つでもある。

魔法が使えない、という状況が生じた時、まず一番最初に疑うべき最悪のケースは、魔力そのものの枯渇だ。

過去、偉大な魔法使いが一夜にしてその魔力を失ったという

例は、少なくともあるが確かに実在している。それゆえまず最初に魔理沙はそれを恐れたのだが――

「マイナス二・六。誤差範囲だな」

試験紙での簡易検査のほかに、いくつか他の方法も試しても結果は同じ。魔力自体に異常は見当たらない。

「つてことはだ」

呟いて、魔理沙は棚上の瓶から取り出した星型の丸薬をいくつか取り出した。そのうちの一つを口に含み、ぼりぼりと齧りながら、残りの星弾触媒を指先で弾く。

少女の手のひらから、たちまち光が溢れ出した。星弾はミルクを溶かしたような七色の星光を描いてくると室内を巡り、次々と群れをなして渦を描くようにあたりを飛び回る。

天井にぶつかり、ぱあんと小さな破裂音を残して消えた星弾を見上げ、魔理沙はようやく納得したように眉間の皺を緩めた。「特に、魔力に異常がある訳じゃなさそうだな。……となると」

魔理沙はベッド横に立ってかけていた箒を取り上げる。

もう何年も乗り慣れた、魔女の箒――質素ながら丁寧に編まれた穂先と磨き抜かれた柄。銀星蓬萊竹の箒は、別段いつもと違う様子があるでもない。

重さや手触り、穂の流れも形もいつも通り。長年使い込まれ、しっかりと手に馴染んだ愛用のものだ。

だが、

「どう考えてもこいつが原因だよなあ」

濡れた髪をかきあげて、魔理沙は独白する。

魔理沙の愛用している箒は、特段、専門の法アクト・オブ・マジック具というわけではない。

簡単に傷んでしまつては困るため、丈夫でしなやかな竹を材料に用いたり、操作しやすいように柄の具合を改良したり、長距離・長時間の飛行時にはクッションを仕込んだり、風を掴みやすいように穂先を加工し、刻んだり、さまざまな改造はしているが、基本的には、そこいらのご家庭で使われているものと同じ、ただの箒である。これ自体に飛ぶための魔法などとは籠められていないのだ。

魔理沙が箒で空を飛ぶためには、箒が箒であることが重要である。空力強化や魔力の伝達などを気にしはじめてしまったら、それはもう箒ではなく飛行魔法の専門収束具である。

箒として使えない箒では、ロクに空も飛べるはずがない。

「……フランのところで穂でも引っかけたか？」

ランプの明かりを大きくして、箒を丹念に検あやめてみるものの、裂け目も焦げ跡も、欠けた部分も見当たらない。

気付かない程度の変化はあるのかもしれないが、そもそもこの箒は長年魔理沙の相棒として共に窮地を潜り抜け、過酷な戦場を駆け抜けてきた古強者である。もっとと激しい弾幕ダンムごっこで被弾して、大きな損傷を受けた事も少なくない。

それでも機能を損なう事がなかったはずの箒が、見えないほどのわずかな損傷だけであつたりと動かなくなるのは説明がなかった。

「ふーむ」

前例のないことに、しばらく難しい顔をして箒を眺めていた魔理沙だが、やがて近くの本の山へと向かい、積み上げられた魔道書の山を引っ掻きまわし始める。

下着姿のまま腕をさすり、ガウン一枚だけを肩にかけた格好で冷えた髪に背を震わせ、くしゅ、と赤くした鼻を擦りながら。

魔法の森の一角にある家の明かりは、夜が白み始めるまで、消えることはなかった。

▼ 紅魔館 大図書館における魔女二人の会話・1

「——それじゃあ、あなたの所にも来たの？ パチュリー」

「ええ」

少女の声は、高い天井に静かに響いた。

紅魔大図書館。広大な敷地に巨大な本棚の群れが峡谷のように立ち並び、無尽蔵に増え続ける蔵書を蓄える、幻想郷随一に

して最大の書庫だ。

本棚と本棚の隙間に設けられたテーブルの片端で、パチュリー・ノーレッジは珈琲を片手に、向かいに座るアリスの顔をちらりと覗き見る。

「そんなに憤るような事かしら」

静かな——しかし決して聞き逃すことのない喋り方は、彼女の魔法使いとしての技量を端的に示すものだ。五声と六律の口訣を巧みに操る舌先は、咳を交えながらも明瞭に言葉を紡ぐ。

こほ、と小さく喉を震わせて、パチュリーは手元の本へと視線を落とし、頁を捲る。その超然とした態度は、相対するアリスにはあまり熱心な態度には思われなかったようだった。

「あまり褒められたことじゃないでしょう。どう控えめに表現しても。……飛べなくなったなんて、自分が窮地に陥るかもしれないことをあつさりと暴露して、あまつさえ魔法^{同業者}使いに解決法を相談しようなんて」

「魔理沙らしいと思うけど。必要なものを欲しがるのには手段を選ばないでしょう？」

「それは盗賊^{シーフ}のやり方であって、魔法^{ウイザードリイ}使いのものじゃないわ」

魔法使いにとつて、工房とそれを取り巻く地下迷宮は自らが拠点として築き隠れ潜む場所であり、間違つてもお宝を求めて潜りこむ場所ではない。

「大体、魔理沙は本業の魔法にしたって脇目を振つてばかりじ

やない。他の様式に興味を持つのは悪いことじゃないけど、魔法を学ぶのであれば、まずは理論と実践を修めてからでも遅くないと思うのよ」

「模倣は上達の第一歩ではないかしら？」

「……自分の設計した呪文式をあんなに稚拙に真似られているの？ 許容できるなんて大人なのね」

「魔法なんて他者に披露した時点で公開術式よ、模倣は起こりうるわ。解析だけならあなたもしているでしょう、アリス？」

術式を丸写しさせるような甘いことはしていないつもりだし、魔理沙も矜持にかけてそんな真似はしないでしようしね。ひとつひとつ模倣して似たものを作り上げているなら、それはオリジナルよ」

「魔法使いとしてそれはどうなのかしら、と言っているのよ」

アリスは眉間にしわを寄せ、紅茶のカップを傾けた。卓上にあるクッキーをひとかけら、口へと運ぶ。食を捨ててかなり経つはずの彼女だが、こうして無意識のうちに味を楽しもうとする癖は抜けていないらしい。パチュリーにはそれが少し羨ましくもあった。

先程からの棘のある態度を含めて考えるに、アリスと魔理沙は些細なことで喧嘩でもしたのだから。

箒の直し方を求めて、魔理沙はここに来るよりも先に彼女の元を訪れていたのだろうし、魔法使いがその方向性の違いで仲

互いをするのは、日常茶飯事だ。

「……見返りなしに、自分の不利を晒すなんて。あまりにも軽率すぎるわ」

「信用されていると考えたら？」

「それが軽率だと言っているのよ。仮にも魔法使いを名乗るなら、相手に手の内を見せないのは最低限の儀礼じゃないの」

「……」魔法使いは孤高であれ、ね」

魔法とはつまるところ、魔法使い自身の根源に根差す秘密の力であり、多くの魔法とは「秘す」ことをその力の源とする。誰も彼もと自分たちの魔法を伝え広めるのは、魔法の根源の力を薄めさせてしまうことに他ならないとする考え方があった。

これはそのまま魔法使い同士の対立を意味し、故に多くの魔法使いは、広く交流を持たず、孤高を愛して迷宮や塔、工房といった自分の領地の中に籠ることになる。

アリスの考え方は魔法使いとしてまったく正しいもので、いっそう理想的とすら言えた。

魔理沙だってそんな風潮があること自体が分かっているけど子供ではないだろう。それなのに、時々彼女はびつくりするくらいあっさりとして、自分のことを曝け出す。

アリスにはそれがどうしても納得いかないことであるらしい。

「……それで、貴方はどうしたの？ パチュリー」

「様式違いの箒の直し方なんて、分かるわけがないからお引き

取り願ったけど——何冊か参考書を持ち出したみたいね。それで修復できるとは思えないけど」

「当たり前よ。箒が触媒や法具だというなら分からないではないけど」

箒で空を飛ば魔法は、魔女術^{ウィッチ}などを中心に広くみられるものだ。妖人^{マンドラゴラ}花や狂茄子^{ダチユラ}を原料とした活性霊の原質——アルカロイドその他の幻覚・覚醒作用を含んだ軟膏を全身に塗って、箒を跨いで局部を刺激する。その性的な高揚感を浮揚の魔法へとつなげるのである。

箒自体にさほど意味はなく、他の物でも代用は利くだろう。もともと魔法的な仕組みを一切持っていないのだから、魔法的な手段で修理などできるはずがない。

「でも、そこまで言う貴方なら相談に乗ってあげるくらいはできたんじゃないかしら、パチュリー？」

「単純にそうとも言えないわ。既存の様式なら、ある程度は知識があるけど」

ヴワル魔法図書館という巨大な大法典^{コーンブック}を持つパチュリーは、知識という形であれば他の魔術様式についても知ることができ。が、蔵書があまりにも膨大すぎて、検索性に難があることから即時性にまったく欠けるのが致命的な欠点であった。

パチュリーの見立てでは、魔理沙の魔法は独自性の強い癖のあるものだ。大鍋、蠟燭、箒と、象徴には新興の様式である魔

女術を取り入れているが、丹薬を練り、草木を煮詰めて魔法を作る一面はそれよりも遥かに古い垣根^{ヘツジク}の魔女^{ウィッチ}を思わせる。

そしてそのどちらも、魔理沙の魔法様式の本質ではないとパチュリーは推測していた。

「伝聞になるけれど、あの河童の子、いたでしょう？」

河童にとりの名前は知っていたが、わざと口には出さずにパチュリーは言った。

山に住む河童たちは、妖怪の中にあつて高度な科学技術をもつことで知られている。閉鎖的な性質とされている河童の少女が、地底からの怨霊騒ぎの時に魔理沙に協力を申し出したことは、少なからずパチュリーやアリスを驚かせた。

「魔理沙は、あの子と道具屋の店主と3人で、箒に化石燃料やエンジン^{エンジン}を積んで改造していた事があるのよ。ちょうどレミイが月に行くの行かないのって騒いでた頃かしらね。

……結局、かなりの推力は出たらしいけどその分重量が増えたのと、飛ぶのに必要な燃料を積んだら全然飛ぶ役には立たなくて、元に戻したみたいだけど」

テーブルの上に、内燃機関で動く外界の乗り物の資料を広げるパチュリー。

色刷りの丁寧な資料ではあるが、三面図や寸法幅も出鱈目なそれは、およそ設計などの役に立つとも思えなかった。この写真一枚からその機械の設計を起こし、組み立てて実際に動かし

て見せたというのなら、驚嘆に値する事実だ。

「これを、魔理沙が？」

「少なくとも、相方に作業を任せきりって事はなかったようね」

「……………」

資料を前に、アリスは眉間に皺を寄せ、じっと考え込む。人形師としての彼女はいたくプライドを刺激されたらしい。

「これは極端な例かもしれないわ。でも、魔理沙は個別の様式に拘っていないことは確かかしら。実践者として必須のナイトル・ファイ、ザ・カル・イン・エンシェンシング、夜の会や秘儀参入にも固執していない。以前に強い導師精霊の教えを受けていた形跡はあるけれど、その割に独自色が強いわ。まるで——」

「……無理やり、様式を変えたみたいにな？」

言葉を切ろうとしたその先をアリスに続けられ、パチュリーは小さく息を飲んだ。自分しか気付いていないだろうという推測に、目の前の人形遣いは至っていたらしい。

そう言えばアリスと彼女は古馴染みのはずだな、と思い返し、図書館の魔女は内心の動揺を隠して舌を動かす。

「そうね。意図的に、別の様式を覚えようと——いえ、それまで身につけた魔術様式を使うまいとしている節があるわ。魔術の影響が濃いのに、わざわざスペルカードに星を象徴ハンドシンボルとしているのも、考えてみればいろいろ不自然よ」

三精——世界を象る日、月、星の三要素のうちのひとつ。そ

れを魔法の原型に選んでいるということは、より大きな力への渴望を示している。それを、ただの未熟な少女の、拙い憧れで片づけてしまつて本当にいいのだろうか

普通の魔法使い、霧雨魔理沙。彼女に対する思いはアリスも同じであつたらしい。二人の魔法使いは揃つて吐息した。

「——で、その魔理沙は今、どうしてるのかしら」

「ああ、それなら……」

▼紅魔館、地下室における吸血鬼との逢瀬

「魔理沙ー!!」

「うお!？」

地下室の重い扉を開けるなり、フランドールはばあつと顔を輝かせ、広げていた本を放り出して、魔理沙に飛びついてきた。勢いのまま絨毯の上に押し倒された魔法使いの鼻先に、あどけない少女吸血鬼の顔が迫る。

数百年を生きているはずの不死の王たる気高さ、妖艶さ、恐ろしさは消えさり、フランドールの表情は大好きな友人の来訪を喜ぶ無邪気な少女のそれになっていた。

目の前の人間がほんの指先のひと弾きで消えてしまうことを理解しているのか、フランはまるで猫のように魔理沙に身体を擦りつけてくる。

「今日は何して遊ぶの!? 私、いっぱい新しいスペル考えてきたんだから!」

さらにさらに瞳を輝かせるフランを、魔理沙は抱きかかえるように身体の上から下ろす。

「残念ながら本日の霧雨魔法店は品切れだ。よって弾幕ごっこはお預けだぜ」

「えー?!」

楽しみにしてたのに、と不満そうに口を尖らせるフランドル。魔理沙はそれをなだめて軽く手を開き、

「ま、たまにや女の子らしくのんびりするのでもいいだろ。いつも弾幕ごっこばかりで、落ち着いてお茶も話もしてないしな」

「うー……いいけど、ちゃんと遊んでくれなきゃだよ」

「そりや勿論だぜ」

先程までフランの寝そべっていたソファに腰掛け、魔理沙は落ちていた本を拾い上げ、埃を払う

「何読んでたんだ?」

「良くわかんないけど難しい本。お姉さまが持ってこさせるの。淑女になるには教養が必要だから、もっと読みなさいって」

「レミリアも大概過保護だな。……なにになに?」

かさかさとした干からびた表紙には装飾の強い独逸語の文字列が並んでいた——『Cultes des Goules 屍食教典儀』。

魔理沙は思い切り顔をしかめて、魔道書を元の場所に戻した。「だったら魔理沙が教えてよ! それ、魔法の本なんですよ?」

「あー……魔法、ねえ……」

曖昧に言葉を濁し、魔理沙は中に視線をさまよわせる。魔法というよりは禁忌の類だが、いったいレミリアは何を思っている本を与えたのか、割と本気で頭を抱えなくなる。

「そういうのはパチュリーが教えてやるもんじゃないのか?」

「パチュリーの講義って回りとどいんだもん。お姉さまは意地っ張りだからいつも適当に分かった振りしてるけど。あの子ってお喋りは好きでも先生には向いてないと思うわ」

フランの評に、魔理沙はさもありなんと頷く。

「そうだな、勉強は面倒で結構だが、知りたい事は知りたいとくに知っておくべきだな」

フランドルの知識は、五百に近いその年齢に比べてひどく歪なものだ。彼女の本質を示したような、畸形の翼は、生来の狂気を象徴している。そんな彼女は彼女なりに、自分に足りない知識を埋めようとしているのだろう。それがレミリアを過保護にさせる原因でもあるのだろうか。

「ねえ、魔理沙。なにかお話して」

「そうだな……この前の月の話でいいか?」

「うんっ」

星と月を装飾に刻んだ天蓋の下、魔理沙のはじめた月面侵略戦争の話に、フランドールは目を丸くして聞き入っていた。

館の外にも余り出たことのない彼女は、遙かな月に対しても他の吸血鬼が抱くものよりも純粹で素直な感情と憧れを持っていたらしい。

月の都でのレミリアの『活躍』にひとしきりおなかを抱えて笑い、話題はお互いの近況へと移る。

「じゃあ、魔理沙、飛べなくなっちゃったの？」

「ああ。……それでパチュリーのところに忍び込んでみたが、ありゃ酷いもんだな。一番まともなのが司書の悪魔ってのは何の冗談だ？ 仮にも図書館なんだからもう少し来客のこと考えた方がいいぜ」

くすくすと笑い、フランドールはすい、と魔理沙に身体を寄せてくる。

「魔理沙は、飛べないと困るの？」

「そりゃな。不便さは半端ないぜ」

「ねえ、じゃあ私が魔理沙を飛べるようにしてあげようか？」
いつの間にか。必要以上にフランの顔が近付いてきていた。
耳元でささやく悪魔の妹とともに、首筋に熱い吐息がかかる。
小さな手がまるで鋼鉄の万力のような腕を掴み、ベッドの上に魔理沙の身体を固定する。紅い唇がかばりと開き、桜色の舌が

艶めかしく白いうなじを舐める。

「ね、まりさ？」

首筋にちくりと食い込む牙を感じ、魔理沙は努めていつもの調子を保ちながら、フランをやんわりと押しとどめた。

「――遠慮しとくぜ」

「えー」

不満そうな声を上げるフランドール。吸血の加減が良く解らずに、つついっ壊されてしまう哀れな犠牲者が日々増えていると聞いて、素直に身をゆだねる気分にはならない。

「うーん。魔理沙だったらうまくいきそうな気がするんだけどなあ」

ばたばたと、色鮮やかな畸形の羽根を揺らして、残念そうな顔の妹様。妖怪と人とは死の概念は別のものだが、吸血鬼にとつてはさらに話が違う。姉以外の家族をほとんど知らずに生きてきたフランドールにとつても、その価値観は根強い。

吸血鬼への〈転向〉が人としての死と同義であるとは、幼い吸血鬼には思いもよらないことのようにだった。

口を尖らせるフランドールに、魔理沙はぼんぼんと箒を示してみせる。

「私はこいつを直したいんであって、飛びたいわけじゃないからな」

「？」

意味が分からないというように、フランドールはこくと首を傾ける。果たして理解してもらえらるうかと思ひながら、魔理沙は頭をかいて彼女を膝の上に招いた。

「……うーん。フラン、もし今日から血が吸えなくなるのと、能力が使えなくなるのと、どっちがいいかって聞かれたらどうする?」

「どうって?」

「フランのものを壊す程度の能力ってのは、べつに吸血鬼の力ってわけじゃないだろ? でも、その能力はフランだけの力だ。それがなくなつたお前と、吸血鬼じゃなくなつたお前は、どっちが元のままのフランドールだ?」

『ありとあらゆるものを壊す程度の能力』は、この気の触れた悪魔の妹の、もっと存在の根幹に結びついた能力であると、魔理沙は思う。

「ん……」

フランはしばし、難しい顔をして首をひねり、やがてばあつと笑顔を見せた。

「えっとね、魔理沙」

フランはすい、と細く骨ばった手を伸ばす。

部屋の隅に積み上げられていた趣味の悪い縫いぐるみの一つがふわりと宙を浮き——彼女がきゅつと手を握り締めると同時に、きちんと弾ける。

破裂というよりは、見えない腕に齧り取られたように。臓物^{内臓}を撒き散らして地面に転がった縫いぐるみを見て、フランはにこにこ笑う。

「そんな五月蠅いこと言う奴は邪魔だから壊しちゃう!」

「……成程な」

実に狂気溢れる答えに、魔理沙は逆に感心していた。

「お前さんは魔法使いでも魔女でも無くて、魔法少女なんだな」

「なにそれ?」

フランドールはきよとんと眼を瞬かせる。分からないなら分らないでいいぜ、と答える魔理沙に、悪魔の妹は少し不満そうに頬を膨らませた。魔理沙はそんな彼女の頭を撫で、

「残念ながら魔理沙さんはそうはいかなくてな。飛び方一つにも拘りつてもがあるんだ。美しくなきゃいけない。こう見えても玄人だからな」

「そういう無駄な事にばかり一生懸命なんだよね」

無邪気に鋭い言葉をぶつけてくるフラン。悪魔の妹は人間関係の破壊も得意である。が、今回ばかりは魔理沙も素直に頷いていた。

「その拘りつてのが重要なのさ。魔法使いの矜持ってやつだ」

「形振り構わなくても大差ないから、カッコつけようって事?」

「そんなもんだな」

手段を選ばなくとも、卑怯に徹しようとも、絶対に届かない

と分かっているからこそ。自分らしいやり方でそこに辿り着きたいと願うのは、きつと無駄ではないと、魔理沙は思う。

「なあ。フランは彗星って見た事があるか？」

「うん。前に壊したことあるよ」

「そりやダイナミックだな。」

……私が魔法使いになろうって思ったのは、まだずいぶん小さな頃だったんだが、彗星を見た年だったんだ。彗星の事をほうき星って言うんだって知ったのはずっと後だったけどな」

だから、魔法使いになる時に箒で飛ぶことにしたのさ、と。

魔理沙は言う。

「ふうん……。でも、それくらいで飛べなくなっちゃうなんて人間って不便なのね」

「ああ。面白いぜ？」

フランドールに答えて、魔理沙は白い歯を覗かせた。

▼ 紅魔館、大図書館における魔女二人の会話・2

「魔理沙なら今頃、妹様のお部屋で密会の最中ね」

「ああ、そう」

耳にするなり、アリスの不機嫌さが二割増しになったことに對する苦笑を、パチュリーは咳で誤魔化した。

「吸血鬼と相談しても解決にはならないと思うけれど？」

「あら。妹様は優秀よ。嫉妬したくなるくらいに」

「……トレメールの氏族？ 串刺し公^{ツヘシキ}の末裔なんて眉唾だと思っ
ていたわ」

パチュリーの言葉に、アリスは訝しげな顔をする。確かにこの幻想郷で、吸血鬼に詳しい魔法使いはこの図書館の魔女を覗いてそういないだろう。

「レミイも同じようなものだけだね。吸血鬼の本質は、個体としての肉体ではなく、その身に受け継がれた血脈なのよ。流れ打つ血脈は数千年を繋ぐ魔法そのもの。それが血族全ての意志を定めて、経験を共有する。……それが魔法にとつてどれだけ有用か分かるでしょう？」

吸血鬼が尊大で傲慢なものそれが理由である。ひとりの吸血鬼が頭を下げるということは、その血族全てが同じことをしたのに等しく、彼等吸血鬼にとつての死とは、血族全ての破壊であるからだ。

「レミイと会うのがあと百年早ければ、私も^{スカレット}紅の血族に転向することを考えていたと思うわ」

「妹の事を思うなら、それも良かったんじゃないかしら」
眉唾だという表情のアリスに、パチュリーも小さく微笑む。

「妹様のご気性はあの通りだからね。……欠けた肉体はそれを埋めるための異能をもたらずものよ。吸血鬼の本質は肉体ではないのだから、答えは自ずと分かるはずね。」

……もつとも、魔理沙はそれをどこまで理解しているかどうか怪しいところだけれど」

畸形なのは、血そのもの。カマリリヤの最後の血族が産み落とした忌み子は、産まれながらの鮮血魔法の射手だったのだと、パチュリーは語る。

フランドールの魔法は、誰にも真似のできないものだ。彼女独自の精神世界——言葉を飾るなら、常軌を逸し一線を踏み越えた場所にある。

「魔理沙だって、間違っても妹様の眷族になりたくはないでしょうしね」

「私にはそこまですて人間であることに拘る意味も良く分らないわ。……吸血鬼になれってことじゃないけど」

そんなのはいかにも非効率だ、と言わんばかりに、アリスは卓上に視線を向ける。 unnecessary なものを切り捨て、削り落とし、ただ魔法に邁進すべきという、如何にも魔法使いらしい言論である。

自身の工房の外であるということからか、どうも警戒が強いなどパチュリーは思う。魔理沙が同席している時はそんな様子も見られない筈だが——それともその時は自分も彼女の様子が

眼中に入らないくらい浮かれているのだろうかと自嘲する
「真似をしている時点で三流にもなれていないのよ。人間が魔法を使っているだけ」

根本的に、魔法使い同士は相容れない者たちである。

繰り返になるが、魔法とは己の根源に根差すものだ。自分がしたいこと、そうありたい姿の実現である。ゆえにパチュリーは動かない大図書館の書監として無数の魔道書に囲まれ、書を読み、管理し、自ら書をしたためる。アリスは第六階梯の人形遣いとして無数の人形達を作り、呼び、操る。

お互いの魔法の根本は、たとえ魔法使い同士と言えども理解不能であり、不可侵なものだ。突き詰めれば魔法使いは、自分以外の全てのものが不要であり、排除するべき異物であるとも言える。相互契約の上で歩み寄ることはあっても、心からの友人など作ることは許されない。

常々、スベルの模倣をやめようとしないう魔理沙のやりかたは、アリスにとって我慢のならない事であるらしい。元人間というアリスの身の上が、殊更に魔法使いたらんと規範を求めているのかもしれないと、パチュリーは思う。

もつとも彼女が胸の内の憤懣を、こうして形にする相手も少ないのだが。

「——アリス。あなたは魔理沙に魔法使いになって欲しいと考えているのかしら？」

「そうね」

問われ、珍しくアリスは何かを思案しているようだった。

「この環境じゃ工房を構えるのも儀式を行うのも一苦勞だし、研究も容易じゃないし。様式が異なるとしても、同志がいるのはお互いに理のあることじゃないかしら」

「あら。光栄ね」

「茶化さないで。それに、魔法を修めようと思ったら、魔法使いになるのは必然のことよ」

「……ふむ」

パチュリーはようやく、アリスの態度の理由に思い至る。

要するに、これまでの非難めいた言葉の真意は、魔理沙に理想的な魔法使いであってほしいという期待の裏返しなのだ。

幻想郷には魔法使いは多くはない。魔道書の入手先も豊富とは言えず、実験や研究に必要となる靈活性原質の収集や精錬にも手間がかかる。そのたびにあちこちの勢力に頭を下げ、交渉し、取引して回るのは実に骨の折れる作業となる。パチュリーのようにパトロンを持ち、紅魔館の顧問魔術師としての立場があるのだから、さぞ苦勞していることだろう。

アリス自身、どうしても手の及ばない作業については、この大図書館の工房を借りているほどだ。魔理沙の構える魔法の森の邸宅に、大規模な作業に耐えうるだけの設備があるとはとても考えにくい。

円環を組むのも魔女会を開くのにも苦勞する身としては、じれったい後輩にやきもきする気分は分らないもない。

魔法使いの大原則にしたがって、孤高であることを選んでいるアリスには、それも彼女への不満の要因となっているのだろう。

顧問魔術師としてはそれなりの苦勞——多くはパトロンであり友人でもある吸血鬼の我儘に付き合ねばならないということ——もあるのだが、それは余計な言葉だろう。

「正式な契約があるわけでもないのだしね」

「ん、何？」

「いいえ。独り言よ」

だが。そうして魔理沙のことを気にかけているアリスも、同時に魔法使いとしてはまだまだだ、とパチュリーは思う。否、あるいは——この幻想郷という場所は、魔法使いにはあまり良い環境ではないのかもしれない。妖怪の賢者が治め、外界に存在を許されなくなったものが幻想となって流れつくこの理想郷で、秘儀も叡智もあつたものではない。

「成る程、レミイの言うこともあながち出鱈目ばかりでもないわけね」

魔法使いという生き物は、俗世を見下し、世界の真理を胸に抱え、それを知らずに平穩に生きる大多数の人間たちを衆愚と笑わなければ存在しえない、実に厄介な代物なのだろう。

「……貴方はどう思うの、パチュリー？」

「さあ、どうかしら」

曖昧に言葉を含ませ、パチュリーは傍らの本の山から一冊の書を抜き取り、頁を捲る。

「人から魔法使いになった例は、他にもあるわ」

▼ 命蓮寺、僧坊における聖人の説法

命蓮寺。昨年ここに開かれた妖怪と人間の共存を掲げる奇矯な寺は、最初こそ奇異の目を集めたものの、今では多くの信徒と檀家を獲得するに至っている。

僧坊に設けられた十畳ほどの畳敷きの大広間で、魔理沙は座主の白蓮と向かい合っていた。里にも近いこの寺の境内は、今も人妖で賑わっていたが、この離れまではその喧騒も遠い。

護法入道連れられた頭巾の尼僧がお茶を替えて退出し、障子が閉じられたのを見、魔理沙は軽く肩をすくめ、

「……ってわけだ。あちこち回ってみたが、解決法どころか手掛かりもさっぱりだな」

「お察しますす」

本当に悲しそうに、表情を曇らせる白蓮。

他の妖怪相手なら皮肉か何かだろうと勘繰る所だが、彼女に至ってそれはないだろうと思われた。

彼女との付き合いは深いとは言えないが、その人となりは一度でも話せば十分以上によくわかる。差別なく、区別なく、あらゆるものを救い助けようとする、心からの善意だ。

その普遍さはある意味、霊夢よりも分かりやすい。

「本来は筋違いかもしれないが、なにか参考になる事が聞ければと思っただけ」

「いえ。仏の道にあるものが教えを求める者を拒んでどうして人が救えましょう。私の知ることによれば、どうぞお聞きください」

「ああ、正直に言っただけ、少しでも情報が欲しい。藁にもすがりたいって奴だ」

魔理沙は明け透けに、役がない事を含めて手札をさらけ出す。こうして一面がアリスを苛立たせる原因となっているのだが、本人は気付いていない。

やや脱線しながらも続く魔理沙の説明を、白蓮は相槌を挟むことなくじっと聞き、静かに頷いていた。

「……って訳だ」

「……………」

話を聞き終え、白蓮は静かに瞑目した。

「では魔理沙さん、お聞きしますが——本日、こちらへはどうやっていらつしやいましたか？」

聞かれ、魔理沙はにやりと口元を歪めた。

「そりや、もちろん飛んできたさ」

——そう。

魔理沙は、決して箒でなければ空が飛べないわけではない。必要があれば他の方法で、いくらでも空を飛ぶことができる。

「そうですか」

その答えを予想していたかのように、白蓮の笑みもまた穏やかなものだった。

「だとするなら、やはり魔理沙さんの方に問題があるのではないかと思います」

大魔法使いは静かに言葉を繋ぐ。

「空を飛ぶという事に限らず、魔法とは、本来人間にはできない事をするための法理——理と領分を超えた行いです。その本質は、人間をやめることに他なりません。仏門にもそうした法理を超える力を求める一面がないとは言いませんが、人として触れてはならない禁忌なのです」

「……流石、坊さんは言う事が違うな」

「そうした観点からみれば、人が魔法を行うために必要とする触媒や法具は、魔法には本来不要なもの。そのようなものを失くして、自在に法理を我がものとするのが魔法の真髄です。魔

法の本質とは、魔法を使うことでも、魔法を覚えることでもなく、己自身が魔法と成ることなのですから。

呪文や触媒を使って威力や精度を上げねばならないということは、それらの助けを借りなければ十分な威力や精度が保てないほど未熟である、ということです」

「いやはや、耳が痛いぜ」

「……お気を悪くされたのなら申し訳ありません」

既に人間としてのパラメータを限界までぶちぎった白蓮だからこそ言える理屈なのだろう。口調こそ穏やかではあったが、その内容は魔理沙を侮辱していると取られかねないものだ。

「箒もそうしたものの一つです。私に魔理沙さんの魔法の仔細までは分かりませんが、たとえるなら松葉杖のようなもので、それがなければ飛ぶ事ができない人間が使うものでしょう。

でも、健康な脚で松葉杖を使うのは、かえって歩き辛くなってしまう」

「……………」

「思うに、魔理沙さんの實力というのは、既に人間の域を超えつつあるのではないでしょうか。——少なくとも、飛ぶことに箒を必要としない程度には」

「持ち上げられても何も出ないぜ？」

肩を竦めておどけて見せる魔理沙。しかし白蓮は、あくまでも真摯な態度を崩さない。心から、目の前の年若い魔法使いを

教え導こうとしているのだった。

「……恐らく、以前から自覚はあったものではありませんか？私と逢うしばらく前、魔理沙さんはあの魔砲マタイスベックを撃つ事を止めた」と聞きます。なぜ、そのような事を？ ああの呪は、魔理沙さんを『普通の魔法使い』たらしめる大切な魔法だったはずですよ。それを使わなかったのは何故ですか？

まさか、撃ちたくても撃てなかったのではありませんか？」

「……ハンデだけ、つて言っても信用ないか？」

言葉を切った白蓮と、魔理沙の視線が静かに絡み合う。僧坊には穏やかな秋の午後に似つかわしくない静寂と共に緊張感が満ちてゆく。

「魔法という、世の理ことわりを超える行いを成すには、人間はあまりにも無駄が多すぎるのです。それ故に人は多くの触媒を、法具を、呪文を、儀式を用いて、魔法を使いやすくしようとする。これは神仏の力を借りるのにも同じことが言えます。神道であれば己を俗世から遠ざけ、穢れを避け、清らかに保つこと己を神の器とするわけです。いかに上手く魔法を使うかということ

は、自分をどれだけ魔法へと近づけられるかの手段と言い換えてもいいでしょう」

そして、その果てに。人間はより強い魔法を求めて、人間である事を止め、『魔法使い』に成るのだ。

「……厄介な話だな」

苦笑いと共に、魔理沙は呟いた。

それは魔法に魅入られた者たちの、業のようなものかもしれない。

魔法使いに成る事は、昆虫の脱皮にもたとえられる。人間だった頃のことを不完全な自分とし、魔法使いに成る事でやっと一人前になれたと喜ぶ。

魔法に憧れ、魔法を使うような連中は、人間である事を嘆くのだ。魔法使いとして自分がいかに未熟で不完全で、如何に出来損ないであるのかと。しかしそんな魔法使い見習いを見て、まともな人間は言うだろう。

——ああ、なんて気の毒に。

あんな事を言うなんて、あの子はきつと気が触れているのに違いない。

「魔法使いとは魔法を使うための種族。魔法を使うものが食と虫を捨てて魔法使いへと成るのは、必然なのです。魔理沙さんはその過渡期にあるということでしょう。このままですぐに致命的な弊害が出るという事はないでしょうが、いずれは心身に強い負担が生じる事も考えられます」

「……なんだか、余命宣告されてる気分になってきたぜ？」

「それだけ大切な事なんです、魔理沙さん」

「いまいち真面目に取り合う様子のない魔理沙に、忠告する白蓮の表情は真剣そのものだった。あるいは昔の自分自身を、魔理沙に重ねているのかもしれない。」

「魔理沙さんは、いずれは魔法使いになることを考えているとお聞きした覚えがあります。以前に魔界についても興味を持たれていましたよね」

「予定は未定ですけどな」

「もしその気がおありなら、渡界先のお世話くらいは出来るかと思えますが」

魔理沙はゆっくりと湯呑みを傾け、大きく息を吐いた。

「ちょうど刻限になったのだろうか、境内の鐘を衝く音が間もなく夕方近い事を知らせていた。」

「——魔法使いつてのは難儀なもんだな。魔法を使ってるつもりが、いつのまにか魔法に使われるようになってる」

己を魔法へと近づけるということは、そう言うことだ。

人間をやめてすら実現したい願いのために、それを望んだはずの自分までもが、失われてゆく。

「魔法使いは、魔法使いにしか成れないが、それはちよつとまだご免被るな」

「危険を承知で、人のまま魔法を使うと？」

「……ああ。しばらくはそのつもりさ」

偉大な先達の忠告を無視してまで、真つ直ぐ答える魔理沙の

視線は、なによりも固い決意を秘めていた。

▼紅魔館、大図書館における魔女二人の会話・3

「……命蓮寺の彼女ね」

聖白蓮。幻想郷にやってきた大魔法使いの名を、アリスは陰鬱に呟く。

寺の落成とともに挨拶回りにやってきたときに一度顔を合わせた程度の関係だが、その時の印象は強く目に焼き付いていた。もとより幻想郷に現れた大魔法使いの動向は、同じ魔法使いとして無視できないが——妖怪と人間の共存を説く仏門の徒を肩書きに持つ魔法使いというのは、あまりにも風変わりだった。

「古今東西、救世なんて口にする人種は、本物の聖人か狂人かでなければ詐欺師くらいしかないと思うわ」

アリスの言葉にパチュリーも同意する。詐欺師は自覚して嘘を吐くが、残りの二つは自分の妄言を心から信じているという意味で概ね似たようなものだ。

つまり、揃いも揃ってろくでもない。

「延命と不老、肉体強化の拡大魔術。仏門を装っているけ

ど、あれはむしろ、魔界の様式に近いものよ」

苦々しくアリスは言い放つ。

貧弱な土地、果てない荒野、けれど魔素だけは馬鹿みたいに溢れている世界それが魔界だ。たった一人の気紛れな神が、その人智を絶する力で生み出した世界の、歪^{いびつ}で禍々しい魔法様式。呼吸するように奇跡を起こし、視線一つで命を産み出す。魔界にあつて神の業とされたその様式は、その実、現世においては無尽蔵にあたりの魔素を食い散らかして、呪力圏を侵食し己の支配領域を広げてゆく、禁忌の様式である。

「汚染様式——いえ、専門化というよりも偏移ね。技量はいくつかのカテゴリを除いて素人同然。魔法も、体術も、未熟とも言える拙い技術を、限界振りしたパラメータで強引に補っているのよ。その上、本人はそれに不都合も感じたことはない」

硬い地面に穴を掘ろうとしたときに、多くの者は道具を必要とする。シャベルやスコップはその為に作られたものだ。手元に道具があるならば、わざわざ使い辛い木の枝で掘ろうとする事はないだろう。だが白蓮は簡単に素手で穴を掘ることができ。だから、道具を使うことの意味が理解できない。

「聖人は衆愚を導けるのか。哲学的な問いね」

「彼女の根源、彼女の魔法は、自分のために、自分が生きながらえて助かるためにあるものよ。それなのに彼女は人を救済しようとする。その志は宗教家としては実に立派でしようけれど、

あまりに歪。少なからぬ弊害を生むわ」

白蓮は決して魔法使いとして恵まれた才能を持っていない。その才覚は凡人と比べても劣るかもしれない。そんな彼女は、死の足音に怯える老境に至ってから、恐るべき執念で常軌を逸する魔法を身に付けたという。

それは狂信に近いエゴの塊だ。寺の盟主を失って嘆き迷う多くの信徒を投げ捨て、死にたくない、老いたくないの一心で得た魔法が執着でなくてなんだというのか。

彼女の救いの手は、つまり、優れた者が惨めな相手へと見せる余裕。己を飾り立てるための優越感と顕示欲によるものなのだと、アリスは言う。

単純で、シンプルで、根源に近いほど良いという魔法使いとしての正論は、そうではない生き物たちとも軋轢を生む。

木端妖怪にしろ妖精にしろ、知恵を付ければ本能のまま、自分の生まれのままに暴れることは控えるものだ。いつまでも好き放題を続けている事はできず、自分の首を絞める結果になる事が分かるから、虫の妖怪だつて虫に世界を征服させるなどという主張を声高にする事は控える。

だが、魔法使いはその逆だ。力を付ければつけるほど、己の本質にのめり込む。そうすることがより大きな魔法を使い、自分だけの魔法へと近づく事になるのだから。

多くの魔法使いは、自分の生まれを悔いる。

あと百年早く生まれていれば、今は失われた残る多くの秘義秘法、その残滓の一端でも、垣間見ることができたろうにと。

基本的に、魔法使いという生き物は、多くの生命が見ているのとは逆を向いて生きているのだろう。妖怪の多くは力を得るに従ってその思考を、意義を、意識を停滞させてゆくものだが、魔法使いは、一方向にしか流れない時間の中で、過ぎ去ってゆく過去を求めている。

「……魔理沙は、魔法使いになるつもりかしら」

「魔法使いとして歩むのなら、避けられない事ね。結局は魔理沙がどうしたいのか、ということなのだけど」

「そんなの分かるはずもないじゃない」

「あら、魔理沙とは貴方の方が古いんじゃないの？」

「……少し、会ったことがあるだけよ」

古い思い出だ。実際の月日はともかく、もうずいぶんと昔のようにアリスには感じられる。魔界との封印が緩んだ事に端を発する、あの異変。

あの頃の魔理沙は、今のように自分だけの魔法を使おうとはしていなかった。

博麗神社すら敵に回した強大で凶悪な悪霊の徒弟となり、まるで天賦の才を持つように、災厄を、災禍を己がものとし、自在にいくつもの魔法を生み、呼び起こしていた。

だからこそアリスは魔界異変の時、禁書までも持ちだしてな

お魔理沙に勝てなかったのだ。

霊夢とも決して仲は良くなかったように思う。今でも喧嘩している姿は良く見るが、あの頃の魔理沙と彼女はライバルというよりは、まるで――

「……アリス？」

軽い頭痛を覚え、アリスは小さく首を振った。こちらを窺ってくるパチュリーに何でもないわと答え、半分冷めた苦い紅茶で無理矢理に唇を湿らせる。

いずれにしても。魔理沙はその事を、努めて忘れようとしているようにすら思える。かつて偉大な師に指示していた事をなかつたことにして、自分だけのたどたどしい魔法を使う。

その不合理、執着は、アリスには理解が及ばない領域だ。

「魔理沙の魔法は、はつきり言って拙いけれど、決して魔法使いとして不十分だとは思わない。それなのにどうしてわざわざ、あんな効率の悪い事を続けるのかしら。愛着ということなら分からなくもないのよ。でも、他に代替手段がある魔理沙がああ箒に拘るのが分からないわ」

魔理沙は別段、箒などなくても飛べるのだ。その事を別段、隠している様子もない。先日も妖精たちを相手しているときにその姿を披露していたはずだった。

「……あくまで私見だけど。あの子は魔法使いであることよりも、霧雨魔理沙であることを選んでいるのではないかしら」

「どういうこと？」

意味が分からないと、アリスは怪訝な顔をする。

「そんなの、弾幕^{スプレッド・ボール}ごっこにおいては有用かもしれないけど、それ以外のほとんどにおいて無為よ？ 魔法使いとしては致命的な欠点になるわ」

「それが魔理沙にとって優先すべきことなのでしょうね」

魔法使いとしての矜持よりも、ごくごく普通の人間であることよりも、霧雨魔理沙は自分であることに拘っているのだ。

「話が繋がらないわ。魔理沙は、魔法使いになりたくて家を出たんじゃなかったかしら」

「——他に目的ができた、ってことでしょね？」

少し疲れた様子で呟くパチュリー。アリスにもその続きは良く解った。魔理沙が拘る相手なんて、幻想郷に一人しかない。

それに、とパチュリーは言葉を継ぐ。

「敢えて自惚れて言うけれど。魔理沙は、私達との関係を損ないたくないと思っているんじゃないかしら」

「……………」

「この、私達、というのが、私と貴方だけを差していないのが実に厄介な話だけれど」

恐らく、「私だけ」ともう少し飾らない言い方も出来たのだろうが、パチュリーは自身の矜持にかけてその弁舌を拒んだようだった。

アリスも胸の中に形容のしがたい感情を抱え、口を噤む。

それを最後に、大図書館には奇妙な沈黙が舞い降りた。静謐な空間、紙とインクの匂いが満ちた広間に、時間を刻む大時計の振子の音だけが規則正しく響く。

このまま、二人の魔法使いの間に訪れた沈黙は永遠に続くかと思われたその時。派手に窓を破る音と共に、元気のよい少女の声飛び込んできた。

「よう、パチュリー、アリス、邪魔するぜー」

図書館に反響する挨拶に、二人の魔法使いは顔を見合わせ、揃って苦笑した。

▼ 顛末・魔女は箒で空を飛び

「魔理沙さん、空が飛べなくなったそうですね!! そのことについてお聞きたい事が——って、ありや？」

大きな風呂敷包みに本日の収穫を詰め込んでぶら下げ、箒上の人となった魔理沙をカメラのフレームに納め、射命丸文はペンの尻でぼりぼりと頭をかく。

「飛んでるじゃないですか」

「意外そうに言われてもなあ。飛んでるぜ？」

文はきよろきよと魔理沙の周囲を飛び回り、首を捻る。

「ピアノ線で吊つてるとか、そういうトリックでしょうか？」

「1、2の3で消えてやればいいのか？」

呆れた様子で答える魔理沙。結局、なんのオチもなく普通に箒がまた飛べるようになったのだと説明する魔理沙に、文は残念そうな表情をみせた。

「なんだ。せつかくしよぼくれている魔理沙さんが見れると思つていたのすけどねえ」

「残念ながらお前さんの期待しているようなことは何にもなかったぜ？」

「ふうむ」

すぐにあつさりと態度を翻す鴉天狗。実際、彼女にとっては真実どうでもよい事だったのだろう。

「では、いったい何が原因だったんです？」

「それが分かればそもそも苦労もなかったんだけどな」

「原因も結果も因果も不明だなんて、謎ですらないじゃありませんか、やだー!!」

「だから、それを私に言われたつて困るぜ」

と言いかけ、魔理沙はたと言葉を止めた。

「ん、まあ、収穫がなかったわけでもないか」

「ほう？」

文がびくんと片眉を跳ねさせる。魔理沙はくすりと笑つて、ぱんと箒の柄を叩いた。

「これが私にとって一番いいやり方だったのが分かった、つてことだぜ」

「……ふうむ？」

いまいち納得いかない風で、文は首を傾げる。

結局。

魔法使いにとっての箒というのは相棒のような、伴侶のようなもので。長年使いこまれた道具が意志を持つように、倦怠期というものがあってもおかしくはないのだろう。

魔理沙の箒は、その房の中からびよこんと一本、青々とした若芽を伸ばして、私にも乗せる相手を選ぶ権利くらいある、と言いたげだった。

(了)

【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『星屑カヴンの箒乗り』は空を飛べなくなった魔理沙を通して、幻想郷の魔法使いのあり方についてあれこれと考えたりする（主にアリスとパチュリー）について書いた、当サークル十六冊目のSS本となります。

キャラの設定や魔法使いの在り方についていつも以上に難しいことや、妄言やらがこれでもかと書き連ねてありますが、要するに魔理沙可愛いよつてことですね。少しでも楽しんでいただければ幸いです。

二次創作を始めた頃、魔理沙には圧倒的な才能の差を膨大な努力で埋めている子なのだというイメージがありました。積み上げてきた努力を否定されたり、自分が凡人であることを突き付けられることを、心のどこかでとても恐れている、脆い少女なのだと、そんな風に考えていました。

空を飛べない魔理沙というのは、そんなイメージの象徴でした。

けれどそれは3年間の活動で少しずつ変わってきたように思います。

魔理沙はとても強くて可愛くて、したたかな年相応の女の子。魔法が使えるなくなっても、空が飛べなくても、ごくごく普通に魔理沙なんじゃないかと気付いた時、この本のプロットは出来上がりました。

今回も白身氏、Riza氏には様々な形でお世話になりました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

また、本作を書くきっかけとなった Feather's Snow さんの『あなたはいつも共にあり』に深い謝辞を。

—— それでは。

また次の機会にお会いできることを願つて。

【奥付】

「星屑カヴンの箒乗り」

平成23年10月16日 東方紅樓夢7

発行 折葉坂三番地 (<http://onhazakablog28.fc2.com/>)

著者 銅おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方Project」の二次創作です。



知ってるか？魔法使いには3種類いる。魔法を使う奴と、魔法に使われる奴と、魔法になっちゃう奴。この3つだ。だから、「私」は…

*Did you know
there are
three kind of Witches ?*

*Those who
cast Spells,*

*Those who
was casted
as Magician,*

*and
Those who
cast "Sorcer law".*

Those are the three.

And her...